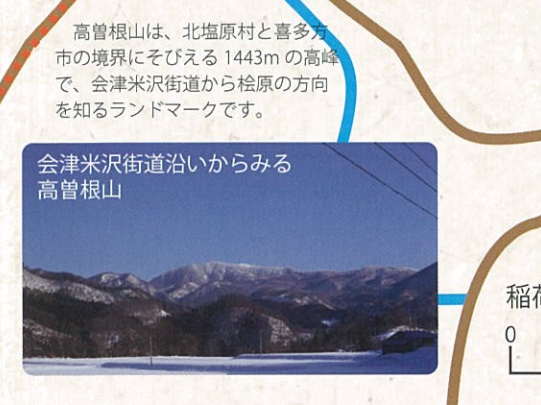


会津米沢街道 大塩歴史さんぽ



会津米沢街道 大塩歴史さんぽ



上川前
 大山祇神社
 岩松寺
 来生寺
 天狗の足跡岩
 川前神楽伝承地
 エミュー試験飼育場

下川前
 「川前の福寿草」
 天狗の足跡岩
 かぼちゃの里
 「川前の棚田」

大塩
 大塩川
 国道459
 会津米沢街道推定ルート

大久保
 正福寺
 稲荷神社
 「川前地区の棚田」撮影スポット

大塩
 大塩川
 国道459
 会津米沢街道推定ルート

大塩
 エミュー
 北塩原村と東京農業大学の共同試験飼育場です。エミューは体長が大人の背丈ほどにもなりますが、おだやかで人なつっこい動物です。

大塩
 温泉神社境内の木々は、「温泉神社の森」として福島県緑の文化財に登録されています。

大塩
 大塩 街道の宿場町。古くは天正期の伊達家の文書に宿泊地として記載されています。直江兼続は、安積～会津～米沢間の道の「駅」に指定し馬を置くように指示しました。

大塩
 中世会津蘆名氏の名城「柏木城跡」
 伊達政宗の会津侵攻に備え、16世紀末頃に整備された山城。会津と米沢を結ぶ道沿いにあり、会津盆地への侵入を阻止するための山城といわれます。出入口や通路などに多彩な石積み遺構が見られ、蘆名氏の城造りや領国防衛の考え方を学ぶことができる貴重な遺跡です。平成26年からの発掘調査により、中国産や瀬戸美濃産の陶磁器、釘などの鉄製品などが出土しています。

大塩
 大塩の塩づくり そのはじめは弘法大師伝説として語られます。具体的な記録が残されるのは江戸時代からで、塩づくりを会津藩の主導でおこない、小物成(税)として納めていました。「若松領大塩村ノ図」(宮城県図書館蔵)では、現在の温泉神社の参道下付近に「潮井」があり、そこから大塩川沿いに木樋を通し、集落の広い範囲に塩泉を供給していた様子が描かれています。木樋には所々溜枡があり、塩泉を汲んで、木樋沿いの小屋で釜を焚き製塩していたと推定されます。

大塩
 温泉神社
 道標 文化8年(1811)「右いなハしろ道 左よねざわ道」と刻まれています。

大塩
 大塩 街道の宿場町。古くは天正期の伊達家の文書に宿泊地として記載されています。直江兼続は、安積～会津～米沢間の道の「駅」に指定し馬を置くように指示しました。

大塩
 大塩 街道の宿場町。古くは天正期の伊達家の文書に宿泊地として記載されています。直江兼続は、安積～会津～米沢間の道の「駅」に指定し馬を置くように指示しました。

大塩
 大塩 街道の宿場町。古くは天正期の伊達家の文書に宿泊地として記載されています。直江兼続は、安積～会津～米沢間の道の「駅」に指定し馬を置くように指示しました。

大塩
 大塩 街道の宿場町。古くは天正期の伊達家の文書に宿泊地として記載されています。直江兼続は、安積～会津～米沢間の道の「駅」に指定し馬を置くように指示しました。

大塩
 大塩 街道の宿場町。古くは天正期の伊達家の文書に宿泊地として記載されています。直江兼続は、安積～会津～米沢間の道の「駅」に指定し馬を置くように指示しました。

大塩
 大塩 街道の宿場町。古くは天正期の伊達家の文書に宿泊地として記載されています。直江兼続は、安積～会津～米沢間の道の「駅」に指定し馬を置くように指示しました。

大塩
 大塩 街道の宿場町。古くは天正期の伊達家の文書に宿泊地として記載されています。直江兼続は、安積～会津～米沢間の道の「駅」に指定し馬を置くように指示しました。

大塩
 大塩 街道の宿場町。古くは天正期の伊達家の文書に宿泊地として記載されています。直江兼続は、安積～会津～米沢間の道の「駅」に指定し馬を置くように指示しました。

大塩
 大塩 街道の宿場町。古くは天正期の伊達家の文書に宿泊地として記載されています。直江兼続は、安積～会津～米沢間の道の「駅」に指定し馬を置くように指示しました。

会津米沢街道沿いからみる高曾根山

「川前地区の棚田」撮影スポット

中世会津蘆名氏の名城「柏木城跡」

「若松領大塩村ノ図」部分 宮城県図書館蔵

新編会津風土記 大塩村図(部分)

大塩名物“山塩”

江戸時代の大塩 江戸時代会津米沢街道の大塩には塩井があり、塩泉を煮詰めて作る「山塩」づくりが産業となっていた。

寛永20年(1643)の小物納納(こものなり:雑税、諸役)には「一塩拾壹石壹斗壹升、塩役、是ハ大塩村より納三拾壹軒分釜壹軒三斗六升」つまり、1軒当たり三斗六升(3.6×18リットル=64.8L、3.6×約19kg=約68.4kg)、36軒分で約2,332L、約2,462kgの山塩を納めていたことになる。寛文5年(1665)の軒数が98軒、人口729人と記録される(大塩組風土記)ので、大塩村の約3割は塩役を課され塩づくりに携わっていたと理解できる。

享和3年(1803)から文化6年(1809)にかけて編纂された「新編会津風土記」には、大塩村の項で「村中二塩井アル故名(づ)ク」として、塩泉を湧出する「塩井」があったことが図入りで述べられる。「塩井」は、「大塩川ノ北大橋ノ東西ニアリ、東の井筒周一丈三尺、西ノ井筒周一丈五尺、共ニ深一丈余」(東井戸は周囲が約3.9m、西井戸は周囲が約4.5m、共に深さ約3m)と記されており、径1m前後の方形井戸と見ることができる。同書の「大塩村図」にはそれぞれの「塩井」の奥に、梁間1間桁行3間程の製塩小屋と思われる建物があり、東側には天秤桶を担ぐ二人が描かれており、江戸時代、「山塩」作りの様子うかがえる貴重な資料となっている。

山塩づくり さて江戸時代の山塩の製法となると、詳細はよくわかっていない。明治16年頃製塩事業の再興計画(北塩原村史)では、塩水溜小屋、分離枠屋、薪小屋、塩液溜小屋、塩煮釜屋などが置かれ、竈には径約2m、深さ約15cmの鉄鍋をのせておこなう計画であった。一方大塩住人から明治32年に提出された明治天皇への献納願いに伴う記録(北塩原村史)によれば、直径約1m深さ21cmの鉄鍋を土竈にかけ、塩水約630Lを一昼夜煮て90Lとし、桶に移して翌朝までおく。そして流水のごとく澄んだ塩水を別の鍋(仕上鍋)に移して10時間煮ることで、「塩壹斗五升」(27L、28.5kg)、「塩汁三升」(5.4L)を作ることができると記される。一度煮た塩水を一晩置き不純物を沈殿させ、上澄み液から製塩する工夫がされていた。大塩での山塩づくりは、その後昭和の戦中から戦後にかけて小規模におこなわれたものの、安定した塩の供給がおこなわれるようになるとすたれていった。

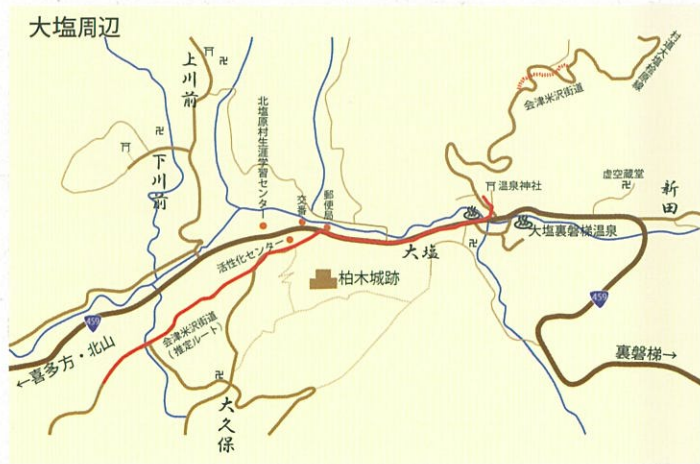
山塩づくりの復活 平成17年、北塩原村商工会は、特産品作りに着手した。大塩地区では山塩づくりの復活が試みられ、平成19年会津山塩企業組合が設立。その後試行錯誤を繰り返して、平成21年虚空蔵公園駐車場に移転し、今につながる山塩づくりの方法や体制が整えられた。

山塩の原料となる温泉水は、大塩裏磐梯温泉の温泉神社近くで湧出する源泉水を使用。タンクに入れて工場へ運び、貯水施設に保管する。塩泉は薪竈で煮込む。竈での火入れは、1:煮詰め、2:塩結晶ができる直前まで煮る、3:鍋をかえて塩結晶ができるまで煮詰めるの計3回おこなわれる。その後、塩と水分(にがり汁)を脱水して分離し、乾燥をおこなう。乾燥した塩は食味を整えるため手作業で不純物を取り除き、容器に詰められようやく商品となる。

この1サイクルには1週間から10日かかり、時間と手間のかかる仕事である。だが歴史と村の期待を背負っている現代の塩づくり職人たちは、日々、誠意をこめた仕事を続けている。

滋味・地味・自味 山塩はグリーンタフという地層に埋もれた太古の海水が、ふたたび地中で溶け出し源泉となった大塩の温泉水を使用している。まさに大地に根差した自然の恵みからおすそわけをいただき、人の手が加わった滋味あふれる“山塩”なのである。

北塩原村

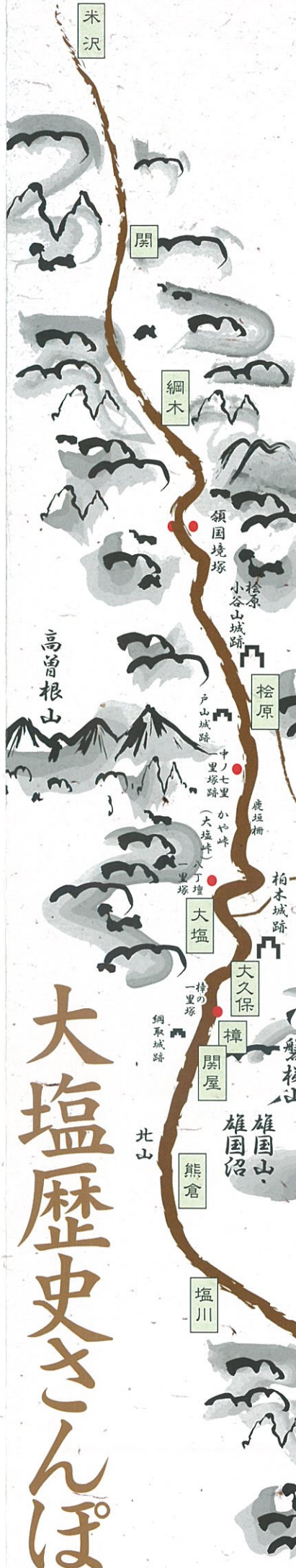


発行・お問い合わせ 北塩原村教育委員会

福島県耶麻郡北塩原村大字大塩字
下六郎屋敷2134番地
電話：0241-23-5236
刊行：平成29年3月31日

北塩原村の“歴史の道”

会津米沢街道



人々の歩みの積み重ねと地域の歴史

会津と米沢を結ぶ道については、史料の記載や遺跡の分布から、室町時代には米沢道・米沢路が存在していたことを垣間見る事ができる。戦国時代には東北を代表する名家、蘆名家と伊達家が鎬を削る歴史の舞台になった。

中世の米沢道 長禄3年(1459)とされる塔寺八幡宮長帳には「たてくちへ当所御せい七千余きにて御立候・・・」とあり蘆名家家臣金上氏が「たてくち」(伊達口。松原峠のことか)へ出兵したことが記される。その後明応3年(1494)、文亀3年(1503)、永正3年(1506)などにも領国をまたいだ戦闘が起きている。この頃、蘆名盛高が穴沢俊家に松原を守らせるようになったとされるが、後世の史料(新編会津風土記・異本塔寺長帳・会津旧事雑考)に記載される年代は一致しない。

蘆名盛氏(1521~1580)の代には永禄7年(1564)、8年に伊達晴宗・輝宗の兵が松原へ攻め込んでおり、「仙道会津元和八年老人覚書別本」には、松原村にいた穴沢新十郎らが伊達勢を撃退したことや、冬季の雪中での戦いの様子が記されている。永禄9年、両家は盛氏の後継盛興の妻を伊達家から迎えることを約し関係が修復された。

天正6年(1578)と見られる伊達輝宗の書状には、蘆名氏への使者が大塩にいる事を記しており(伊達家文書)、大塩は当時宿場であったことがうかがわれる。松原周辺が再び不穏となるのは天正12年(1584)、蘆名家当主盛隆の死去とその後継に亀若丸が幼くして擁立された後のことである。これにより蘆名家は常陸の佐竹家寄りの姿勢を鮮明にし、伊達家との関係を悪化させる。おりしも同年、伊達家の家督を継いだのが伊達政宗であった。

伊達政宗の会津侵攻 伊達政宗は翌年の天正13年(1585)5月3日、松原峠を越えて会津領松原に侵入し、略取してしまう。

この件は後に伊達成実が記した「政宗記」によれば、前日に申倉越から入田付に入った伊達家臣原田宗時が負けたことが同日には政宗の陣に伝わり、政宗が米沢から軍勢を呼び寄せている間に、松原の蘆名勢は大塩へ向かい城に籠って守りを固める(「会津の人数は大塩に楯籠り、城は堅固に相抱へけり」政宗記)。この城は現在(H29)発掘調査が進められている柏木城跡が該当すると考えられ、「伊達勢も同八日に、大塩の上の山まで働きけれども、山中にて道一筋なれば備を立てべき地形なし。大山(を)隔て後陣は松原を引離れざれば、合戦には及ばず・・・」(政宗記)として松原に引き返している。松原から米沢道を越えてきた政宗軍は、大塩を眼下にしつつも、山中の狭い道の中で陣形を取ることが出来ないを見て、柏木城に籠る蘆名勢との戦闘を避けて米沢道を通り松原まで引き返したようだ。

上杉景勝の頃 慶長3年(1598)に会津に入った上杉景勝の重臣、直江兼続が記した書状にも「横川 中山 猪苗代 高柳 大塩 松原 つなき 関」の「町中肝煎」に対し「伝馬二匹あい調うべきものなり」(慶長(5年)八月八日直江兼続判物)と命じており、大塩と松原は道の「駅」とされていたことがわかる。

米沢街道 米沢道が「街道」として整備されたのは江戸時代のこと。慶安2年(1649)、会津藩主保科正之が江戸幕府に報告したなかに米沢街道があり、会津藩内と隣国を結ぶ会津本街道五筋の一つであった。米沢では会津街道と呼んだ。米沢街道は、城下会津若松を発し塩川、熊倉を経て、大塩・松原(北塩原村)、綱木・関(米沢市)を通り米沢に至る14里(約56km)を結び、当時各所に整備された宿場や一里塚はところどころに今も残る。北山・大塩・松原の歴史の多くも、この往來を歩む人々の足跡が積み重なって刻まれている。

今日では、歴史街道として始点と終点がわかるように、会津米沢街道と呼ぶこともある。